

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第5回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門:2013.5.25(土)~6.9(日) ピアノ部門:2013.6.16(日)~30(日)

第5回仙台国際音楽コンクールヴァイオリン部門評

未来への栄光

青澤 隆明(音楽評論家)

音楽コンクールが、地域社会や若い音楽家を含む様々な意味で未来への投企だとしたら、仙台国際音楽コンクールが第5回までの仕事を完遂したことは、ほんとうに喜ぶべきことだ。とくに2011年の大震災を乗り越えるさなかでの今回の開催は、運営実施サイドの強い意志と、音楽愛好家の枠を超えた地元住民の方々の思い、審査委員やコンテスト、ボランティア・スタッフを含めた関係者の熱意が重ならなければ、到底達成できなかったことだろう。

2010年の第4回コンクールの折、私はピアノ部門のファイナルを聴いたが、そのときに宿泊したホテルも今回は姿を消していた。ヴァイオリン部門のファイナルが終了してまもなく、そのときのピアノ部門の優勝者ヴァディム・ホロデンコがヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールを制したというニュースが伝わってきた。前々回ヴァイオリン部門優勝者の共演ピアニストとして来仙したことが、前回コンクールへの自身の挑戦のきっかけだったと語っていた彼である。

仙台的コンクールがきちんと3年ぶりに帰ってきたのと同じく、コンクールで仙台に帰ってきた人もいた。そして、ずっと次回への期待を繋いでいた人々たちも、しっかりと準備を積み上げてきた人々もいた。たとえば、前回第4位に入賞したキム・ボムソリは、3年間研鑽を積んで、またこのコンクールの舞台に戻ってきた。結果だけをいえば、ひとつ順位を落とすことになった彼女は、仙台国際音楽コンクールの水準が一段と上がったことを痛感したはずだ。名門とされるロン＝ティボーの2010年、エリーザベト王妃の2012年とともに第2位の成績を収めた成田達輝が出場したことも、最後まで話題をさらうことになった。

仙台国際音楽コンクールが数ある先行コンクールに対して、どのような存在感を担うことになるのかという意味でも、第5回の節目の機会は重要な意味をもっていただろう。客席やロビーにはさまざまな世代から広い層の聴衆が集い、それぞれに率直な気持ちを表しながら、彼や彼女ひとりひとりの挑戦を見守っていた。常連の聴衆にとっては、このコンクールが彼らの人生の歳時記の重要な一部となっているようにみえた。

私は6月7日と8日のファイナルで、3人ずつの演奏者を聴いただけだが、このコンクールの高次の目標はまず、課題曲の質量にしっかりと象徴される。2日間で6人のヴァイオリニストが独奏するブラームスの協奏曲を聴く機会は、私には初めてだった。そもそも若手にはなかなか演奏する機会めぐらない大曲ではないだろうか。予選ではバッハの無伴奏とモーツァルトの協奏曲、セミファイナルではベートーヴェンの「ロマンス」と20世紀の協奏曲を聴かせた後、ファイ

ナルではブラームスの大曲に臨むことになるが、このプロセス自体が若い奏者たちに対する厳格な教育的配慮をもつものだ。ここで強く問われているのは、楽器を弾き鳴らす技巧能力や安定した精神力だけでなく、作品の理解と様式感を把握した表現である。加えて、アンサンブルや対話の能力も臨機応変に試されることになる。

本選の6人のステージでは、年齢差を超えてまず、協奏曲の演奏経験の大小が一聴して顕著に表れていた。二日目の演奏からいうと、楽器を歌わせる能力と響きの流麗さにおいて、成田達輝には一日どころか数日の長があるようにみえた。富井ちえりはしっかりした存在感をもって芯を通したが、オーケストラとの共演経験はこれからの課題だろう。リチャード・リンは緊張を露わに舞台へ登場したが、しだいに持ち味の抒情性を発揮して、清らかな輝きを放っていた。初日のステージで、最年長のスリマン・テカッリは一段落ち着いた演奏を披露し、キム・ボムソリは強い口調で準備してきた彼女の型を通した。最年少のアンナ・サフキナは自由な主張を模索していたが、それが内面から自然な発露か、習いの課程なのかは、まだ克明にはわからなかった。

ブラームスは作品の確かな内実と構築性で、彼らそれぞれの挑戦を支えていたが、いっぽうで、なかなかその波面が微笑むことはなかった。リンがリリカルな清冽さと求心力で、富井ちえりは情熱と構築の質で、ブラームスの表現内容に近づこうと努めていた。順位は発表のとおり。この結果が、これからどのように若い挑戦者たちを鍛え、また励ましていくのかは、聴き手の立場でコンクールをとともに体験した私たちにとっても、今後の楽しみである。



第5回仙台国際音楽コンクール ヴァイオリン部門審査結果

- | | | | |
|----|-----------|-------|----------|
| 1位 | リチャード・リン | (21歳) | アメリカ/台湾) |
| 2位 | 成田 達輝 | (21歳) | 日本) |
| 3位 | 富井 ちえり | (21歳) | 日本) |
| 4位 | アンナ・サフキナ | (18歳) | ロシア) |
| 5位 | キム・ボムソリ | (23歳) | 韓国) |
| 6位 | スリマン・テカッリ | (25歳) | アメリカ) |



第5回ヴァイオリン部門の栄冠を勝ち取ったリチャード・リン

第5回仙台国際音楽コンクールヴァイオリン部門レポート

第5回仙台国際音楽コンクールヴァイオリン部門予選(2日目)とコンクール期間中に開催した関連事業「審査委員によるマスタークラス」「学校訪問ミニ・コンサート」を音楽評論家の山田治生さんに取材、レポートしていただきました。



◆ヴァイオリン部門予選

ヴァイオリン部門予選は、5月25日から27日まで行われ、34名が出場した。課題曲は、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第1番の第3曲と第4曲、そして、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲(第1番)変ロ長調K207、または、同協奏曲(第2番)ニ長調K211の全曲である。モーツァルトの協奏曲では、指揮者なしでのオーケストラとの共演が課せられた。オーケストラ相手に自分で指揮するのか、ヴァイオリンを弾きながらオーケストラに合図を送るのか、あるいは、オーケストラのことはコンサートマスターに任せて、自分はヴァイオリンに専念するのかは出場者の判断に委ねられた。そのどれを選ぶかが審査にどのように影響するかは知らない。しかし、どのようなスタイルを採るかには、出場者の音楽観が示され、それは聴き手にとっても大変興味深く感じられた。実際、第1楽章序奏を指揮者のように指揮する者もいたし、オーケストラとともに一緒に弾く者もいた。

私は2日目の3番目のキム・ミンギョムから12番目のシン・スビンまでの10人を聴いたが、今回は全体的にレベルが高く、全員がこのステージに上がるにふさわしい技量を有し、それぞれに魅力的な音楽を奏でていた。34人のうちセミファイナルに残れたのは12人だけであり、3人に2人は落ちるわけで、これはかなりの難関であったといえよう。

セミファイナルに進めたか進めなかったは、紙一重であったように私には思われる。私が聴いた出場者のなかだけでも、楽器を美しくならし、生き生きとした音楽を奏でた濱尾健、伸びやかな美音が印象に残るキム・ミンギョム、時にノン・ヴィブラートも取り入れ、明確なアーティキュレーションで弾いたマリヤ・クラスニク、明解なフレーズで音楽の表情を際立たせたフォードル・ルディン、集中度の高い演奏を繰り広げたシン・スビンは、次のステージには進めなかったが、是非もう一度聴きたい逸材であった。



◆審査委員によるマスタークラス

仙台国際音楽コンクールに招かれた審査委員は、いずれも、世界的に著名な演奏家または指導者であり、審査だけでは「もったいない」ということから、このマスタークラスが始まった。受講生は将来有望な若いヴァイオリニストたち。5月28日と29日に公開でひらかれたヴァイオリン部門のマスタークラスは、フェリックス・アーヨ、チョーリャン・リン、ピエール・アモイヤル、シュミュエル・アシュケナージ、スヴェトリン・ルセフ、ミハエル・ヴァイマンが講師を務め、学生や熱心な音楽ファンが聴講に訪れた。

アシュケナージとルセフは、細かく演奏を止めて注意する厳格なレッスン。アーヨは、ベテランらしい経験に裏打ちされた言葉が印象に残る。アモイヤルのレッスンは、フランスの伝統が感じられる。ヴァイマンは、ヴィブラートの大小まで細かく指導。



チョーリャン・リン先生によるレッスンの様子

最も印象に残ったのは、チョーリャン・リン。受講生のためになり、一般の聴衆も楽しめるマスタークラスだった。中学3年生の三澤響果はサラサーテの「カルメン幻想曲」を弾いたが、リンは、ユーモアを交えながら、彼女が自分の殻を破って、今まで経験したことのないところまで行くように導こうとしていた。実際、彼女の音楽は1時間のレッスンを通して大きく変わり、聴衆にもそれがわかった。

審査委員のマスタークラスを見れば、彼らがどういう音楽を、どういう音を望んでいるのかがはっきりわかる。マスタークラスの聴講は、コンクールを受けようと思う若者にも、コンクールを楽しむ音楽ファンにも、たいへん有益である。

◆学校訪問ミニ・コンサート

学校訪問コンサートは、コンクール開催期間中に、次の審査段階へ進めなかった出場者が小中学校に出向き、生徒たちのために演奏するというもの。5月29日の仙台市立折立中学校でのコンサートには、アルバニア出身のレジ・パパが出演した(ピアノ伴奏は小熊由里子)。体育館の壇上での演奏。生徒たちは教室の椅子を運び込んで鑑賞した。全校生徒330人。ベートーヴェンの「ロマンス 長調」やマスネの「タイスの瞑想曲」など穏やかな曲で、レジ・パパは無理のない自然な演奏を披露したが、生徒たちは静かに聴き入り、広い体育館で音響機材を使わなくても、十分に音楽が伝わっているのが感じられた。最後はヴァイオリン、ピアノとともに生徒全員で「With You Smile」を合唱。短いながらも心温まるコンサートだった。レジ・パパは、「私はコンサートで弾くのが大好き。今日は生徒さんたちと一緒に楽しかった」と感想を述べていた。



第5回仙台国際音楽コンクール優勝者記念リサイタル



■ピアノ部門優勝者 ソヌ・イエゴン ピアノリサイタル

- ・2013年12月14日(仙台)
- ・2014年6月20日(東京)

◇会場

【仙台公演】日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)
【東京公演】浜離宮朝日ホール

■ヴァイオリン部門優勝者 リチャード・リン ヴァイオリンリサイタル

- ・2013年12月6日(仙台)
- ・2014年6月19日(東京)

※詳細は後日発表します。



コンクール熱演をYoutube配信中!!

予選から入賞者記念ガラコンサートまでの演奏をYoutubeで配信しています。(配信は9月末まで)
http://www.simc.jp/video_feed/index.html

最新情報はFacebookから

仙台国際音楽コンクール公式Facebookでも最新情報を配信! ぜひ「いいね!」をクリックしてください!
<https://www.facebook.com/SendaiInternationalMusicCompetition>

